

ボーイズラブ回顧年表：ぶどううり・くすこ文責

—文献及びぶどううり・くすこ個人の記憶並びに確証が持てるであろう伝聞に基づく—  
出典は可能な限り明記

1978年10月1日

『comicJUN』（サン出版・刊）創刊

1979年2月1日

『comicJUN』3号、『JUNE』と改題され刊行される。  
以降誌名は『JUNE』に定着。これが所謂「大 JUNE」と通称されるもの。

1979年4月1日

『JUNE』（『comicJUN』）通巻4号刊行  
編集後記にて誌名変更の理由が明かされる。  
《株式会社ジュンの商標と混同される恐れがあった為》との事。

1979年12月20日

同人誌『RAPPORTI（らっぽり） やおい特集号』刊行（発行責任者：波津彬子）  
収録された座談会（「らっぽり特別企画 やおい対談」）にてやおいの定義を  
冗談交じりに話し合う。 現行の原義『山なし落ちなし意味なし』はここから  
由来するものか？  
なお座談会中には遡る事7年程前に既にこの定義に基づいた掌編が成立して  
いたとの証言もある。 【再録；「小説 JUNE」2001年3月号/通巻129号】

1979年8月

『JUNE』一時休刊【国立国会図書館雑誌検索にて確認可能】

1980年10月5日

『ALLAN』（みのり書房・刊）創刊。アニメ情報誌『OUT』増刊号としてスタート。  
途中独立刊行化するも1984年6月・通巻22冊にて『JUNE』のライバル誌としての  
歴史を閉じる。

1981年5月25日

『ふあんろ一ど』（ラポート・刊）5号掲載「ふあんろ一ど★くりにつく」にて  
回答文中に「シヨタコン」の文字が登場。（74ページ）  
「シヨタコン」の初出。

1981年10月5日

『JUNE』、『劇画ジャンプ』増刊として復刊。  
以降『JUNE』ブランドは現在まで形式を変えつつも継続。

1982年1月

竹宮恵子、『JUNE』誌上で「お絵描き教室」を展開開始。  
（情報収集先：「竹宮恵子の図書館」北館  
<http://www.eurus.dti.ne.jp/~miyabi/kt-lib/north/north-illustessay2.htm>）  
この一連は後に角川書店発行『マンションネコの興味シンシン』及び  
『マンションネコの興味シンシン（続）』（ともに1984年発行）に再録され、  
後に筑摩書房から2001年に刊行された『竹宮恵子のマンガ教室』にも抄録された。

1984年1月

『JUNE』誌上に中島梓（栗本薫）を道場主とする小説講座「小説道場」が開設される。  
この連載の一連は後に新書館から単行本化（1986～）され、後に光風社出版より  
新版として再刊（1992～）された。

1987年1月24日

別冊 COMIC BOX1『つばさ百貨店』（ふゅーじょんぷろだくと・刊）刊行  
現在の二次創作ジャンル別アンソロジーの祖であると思われる。A5より幅が狭い  
ムック形態。

1987年7月1日

別冊コミックボックス3『つばさ五段活用』—つばさ同人誌傑作アンソロジー—  
（ふゅーじょんぷろだくと・刊）刊行。  
こう言う内容の刊行物に『アンソロジー』と冠した祖と思われる。A5より幅が狭い  
ムック形態。

1988年3月  
青磁ビブロス創業。

(1997年にビブロスに社名変更→2006年に倒産後リブレ出版として再生)

1988年4月20日  
FRESH PACKS『メイドイン★星矢』—星矢同人アンソロジー—(青磁ビブロス・刊)  
刊行。

青磁ビブロス(後ビブロス→リブレ出版)創業間もない頃の仕事。  
この時点でカバー付A5版・ISBN付と言うアンソロジーの流通形態が整う。

1988年11月  
この界隈初の音声メディアと言えるカセット JUNE の創刊。

「鼓ヶ淵」(三田菱子原作)が第一号。  
往時大 JUNE でも作品を描いていた中田雅喜がエッセイ漫画「ももいろ日記」の一編に  
作品視聴所感を描き残している。

(所収:「ももいろ日記 下」ユック舎・批評社/1991.1.10 初版、71~74頁)

1990年1月1日  
コミックマーケット第2代代表・米沢嘉博が『現代用語の基礎知識 1990』  
(自由国民社)掲載「マンガ文化用語の解説」文中で《少女アニメファンの一部を  
“やおい族”とよぶこともある》と言及。

1990年4月  
青磁ビブロスより PATSY コミックス創刊。  
少女漫画レーベルではあるがその範疇にはボーイズラブ風味の作品も含んでいた。  
あくまでもボーイズラブ専門レーベルでは無い。

1990年8月1日  
『GUST』(桜桃書房)、アンソロジー形態で創刊。キャッチフレーズは“YAOI COMIC”。

1991年1月1日  
コミックマーケット第2代代表・米沢嘉博が『現代用語の基礎知識 1990』  
(自由国民社)掲載「マンガ文化用語の解説」文中で《やおい》を独立項目として  
解説。  
“ヤマなしオチなしイミなしの略であり、ショタコンと少年愛路線(JUNE派)が  
結びついて生まれたもの”とほぼ断定。この基本定義は2002年版で米沢が解説員を  
退くまで変化せず。

1991年4月20日  
有限会社すたんだっぶ出版部(代表:荒木立子/あらきりつこ)がオリジナル  
アンソロジー「Boy Beans」SPRING 1 を刊行。  
“女のこによる女のこのための男のこの本”“男のこどうしだっっていいじゃない”と  
表紙に謳う。  
なお、巻末広告には10月刊行予定の次号刊行予告が掲載されているが実際は  
刊行されていない。  
10月刊行予定号の内容を一部改変されたものが同年12月、白夜書房から  
「イマージュ」として刊行された、と資料からは読み取れる。  
なお、「Boy Beans」誌面に『BOYS LOVE』と言う語彙は出てこない。

1991年12月10日

『イマージュ』（白夜書房・刊）創刊。  
キャッチコピーに“BOY'S LOVE COMIC”と冠する。  
「ボーイズラブ」と言う言葉の初出であると考えられる。  
考案者は編集プロダクション『すたんだっぷ』代表・荒木立子（白城るた）とされている。

【2004年8月、漫画家の河内実加が自身のWEB日記で『“ボーイズラブ”はあらかりつこ（荒木立子）が命名したもの』（大意）と言及。

MacaMica-まかみか Mika Kawachi's Talking

<http://www.asahi-net.or.jp/~rj4m-kwc/>

DIARY→OLD→2004年8月→6日付記事】

ただし現在の定義そのものではなく「耽美」或いは「JUNE」の置換語と認識されていた節がある。

また同日、勁文社より神崎春子の小説『瞳に星降る』が“耽美小説 SERIES”の初回配本として刊行される。この傾向の商業区分としての《耽美小説》はここに始まったものと思われる。

このシリーズはハードカバーであったが新書版の大きさであり一段組であった。現行のBLノベルズ版版組の原型になったのでは無いかと思われる。

1991年12月20日

『b-Boy』（青磁ビブロス・刊）創刊。

「ボーイズラブ」の文字は誌面に一切出てこない。

1992年4月

白夜書房が“白夜耽美小説シリーズ”刊行を開始。

1992年6月30日

『小説イマージュ』（白夜書房・刊）創刊。

キャッチコピーに“BOY'S LOVE NOVELS”と冠する。

のちの雑誌『小説イマージュ CLUB』（白夜書房→コアマガジン・刊）である。

但しここに掲載された作品は概ね「耽美」と解釈されていた様子。

「ボーイズラブ」と冠した作品もレーベルも往時はなかった。

1992年12月

角川文庫よりルビー文庫創刊。

但し純然たる創刊ではなく先行して存在したスニーカー文庫（87年創刊）からの独立創刊と言う形であり、更に言えばJUNE（後にBLも取り扱う）専門レーベルとして創刊された訳でも無い。

スニーカー文庫に於いても栗本薫「終わりのないラブソング」 / 三田菱子「鼓ヶ淵」 / 尾鯉あさみ「舞え水の花」 / ごとうしのぶ【タクミくんシリーズ】はじめ原田千尋や野村史子らの諸作品が刊行されていた。（1990年2月頃以降とみられる）

これ等諸作品はルビー文庫に移行した。

なお創刊から暫くの間ラインナップを見る限りでは集英社コバルト文庫の発展形を目指していたのでは無いかと考えられる。

1992年12月

青磁ビブロスよりBE×BOYコミックス創刊。

ボーイズラブ漫画の専門レーベルとしては第一号と認識して良いかと思われる。

浜田翔子『夢の子供』は第1巻がPATSYコミックスから刊行され、第2巻以降こちらのレーベルで刊行。後に第1巻もこちらから再刊された。

1992年12月25日

二見書房より耽美小説シリーズとして“Velvet Roman シリーズ”刊行開始。

初回配本された神崎春子『ベイシティ・ブルース』は元々『小説JUNE』及び同じサン出版から刊行されていた同性愛者向け雑誌『月刊さぶ』に掲載されていた作品である。

また同作品は後年二見書房が創設したボーイズラブ作品レーベル“CHARADE BOOKS”にボーイズラブ作品として採録された。

1993年5月

青磁ビブロスよりBE×BOYノベルズ創刊。

ボーイズラブ作品を軽装ノベルズ形態にした初めてのレーベル。

1993 年 8 月 1 日

角川書店あすかコミックス DX より中田雅喜『蠍座の少年』刊行。  
JUNE 初出のシリーズ作品ではあるが継続して『獅子座の男』『双子座の天使』  
『牡牛座の恋人』『魚座の騎士(ナイト)』とあすかコミックス DX にて  
刊行され続け、そのまま現在は品切れ。  
あすかコミックス DX より BL 用レーベルの CL-DX が分岐した事実との  
因果関係は不詳。

1993 年 11 月

『magazineBE×BOY』（青磁ビブロス）独立創刊。

1994 年 3 月 1 日

雑誌『Charade』（二見書房・刊）創刊。  
キャッチフレーズは“BOYS' LOVE for GIRLS”。  
白夜書房以外で「ボーイズラブ」と言う言葉を使った嚆矢となる。  
定義は明示されていないが現行にかなり近いものであると考えられる。

1994 年 8 月 1 日

マンガ情報誌『ぱふ』（雑草社）8 月号にて  
特集「創刊ラッシュで戦国時代突入—『BOYS LOVE MAGAZINE』完全攻略マニュアル」が  
組まれる。(52~60 ページ)  
『ボーイズラブ』と言う言葉の伝播に一役買った特集では無いかと思われる。

1994 年 11 月

二見書房より CHARADE BOOKS 創刊。  
ノベルスもコミックも同一レーベルの下で刊行。  
『ボーイズラブ』をレーベルのキャッチフレーズとして明確に持ちいた嚆矢であるか？  
ここより発展したシャレード文庫は 1998 年 1 月創刊。  
キャッチコピーは「爽やかボーイズラブに夢中!!」。

1997 年 3 月

版元としては中堅所に位置したヒカリコーポレーション（旧社名：ひかり出版）、  
ほぼ予告無しに倒産。同社から刊行された作品群の内再版されたものは極めて少ない。

1997 年 4 月

青磁ビブロス、ビブロスに社名変更。

1997 年 9 月 15 日

『b-Boy Zips』（ビブロス・刊）4 にて読者投稿の一節に「BOY'S LOVE」と  
記される。(271 ページ)  
ビブロスの刊行物に「ボーイズラブ」と掲載された最初であると思われる。

\*\* 『ぱふ』の特集の煽りの如く 90 年代前半頃は雑誌が創刊されては  
消えてゆくという現象が良くみられた。詳細は略すが B5 版（大判）の  
雑誌も決して少なくはなかった。ただそれらに 掲載された作品が単行本に  
採録された例はかなり少ないと思われる。 \*\*

1998 年 12 月 5 日

『コミック JUNE』（マガジンマガジン・刊）VOL. 4 で現行形式となる。  
キャッチコピーは“21 世紀を愛で切り裂く原色のボーイズコミック誌見参!!”。

1999 年 8 月 11 日

ネット上で「腐女子」の使用目撃例が報告される。  
【日記・Diary: 1999.08 まで（赤穂 昭太郎 / Shotaro Akaho）  
[http://www.geocities.jp/shotaro\\_akaho/diaryj-199908.html](http://www.geocities.jp/shotaro_akaho/diaryj-199908.html)】  
腐女子関係の最古のネット記録と思われる。  
同時にこれは出典を明記できる現存最古の記録であるとも思われる。

2001 年 9 月

米・カリフォルニア州にて“YAOI-CON”開催される。  
以降年一回開催され、日本からも開催毎にゲストを招く様になる。

<http://yaoicon.com/>

《日本からの招聘ゲスト一覧》

2001 氷栗優・黒川あづさ・新宿西口・米沢嘉博

2002 新田祐克

2003 櫻井しゅしゅしゅ

2004 やまねあやの

2005 こだか和麻・氷栗優

2006 わたなべあじあ・川唯東子

2007 沖麻実也・川原つばさ・高永ひなこ

2008 大和名瀬・かいやたつみ

2009 南かずか・宮本佳野

2010 やまねあやの・置鮎龍太郎・木内秀信・高永ひなこ・宮本佳野

2011 稲荷家房之介

2012 小笠原宇紀

なお、同イベントは個人主催により開始されたが2011年

以降、アメリカの出版社Digital Manga Publishingの

手による開催となった。

参照：<http://en.wikipedia.org/wiki/Yaoi-Con>

2001 年 11 月 25 日

『b.p.m.—Boys Paradise Magazine—』#01（工学社・刊）刊行  
BL ゲーム紹介とインターネット活用術と同人活動指南、そして  
801 とゲイの橋渡しを多様な解説で目論むと言う贅沢な内容の一冊。  
但しこの一冊のみで後続はいまだ無い様子。

2002 年 1 月 7 日

『magazine BE×BOY』（ビブロス刊）1 月号発行。  
キャッチコピーは「夢見る BOYS LOVE マガジン★」  
以降表紙キャッチコピーに“BOYS LOVE”を盛り込む

2002 年 8 月

「オトコのヤオイ好きの憂鬱」

<http://www2.bbbspink.com/801/kako/1029/10299/1029955810.html>

4 番レス（2002 年 8 月 22 日記述）にて「腐女子」との洒落合わせと  
言う形で「腐兄」と言う 男性やおい愛好者の自称が提唱される。

また 69 番レス（2002 年 8 月 29 日記述）にて「腐男子」が一般的に  
用いられていると発言されたが 論拠等は示されず。

なお、この時点で腐男子にも腐兄にも百合好きと言う属性は付記されていない。

2002 年 10 月 1 日

「小説 JUNE」（マガジン・マガジン刊）2002 年 10 月号【通巻 144 号】

特集《男と男の抒情詩！『さぶ』大辞典》掲載インタビュー（142 頁～）に於いて

『comicJUN』創刊編集長・『さぶ』創刊編集長を歴任した櫻木徹郎

（当時『小説 JUNE』編集長。現マガジン・マガジン専務取締役）が

「『さぶ』は元々（『ジャン・ジュネ』の世界観を考えて）『ジュネ』と言う

誌名になる筈だった」（要旨）と発言。

2003 年 6 月 7 日

B6 版オリジナルアンソロジー『恋だろ!?恋!』13（光彩書房・刊）読者コーナーにて  
編集部から読者への呼びかけとして「腐女子」が用いられる。（168 ページ）  
現在明確に確認できる「腐女子」活字化の嚆矢か？

2004 年

アメリカにて専門出版社“YAOI PRESS”発足。

<http://yaoipress.com/>

2004 年 5 月 1 日

『ぱふ』（雑草社・刊）2004 年 5 月号巻末掲載「ぶらり途中下車の旅」池袋（東口方面）編  
文中に於いて「乙女ロード」の名称が始めて用いられる。

2004年8月11日  
B6版オリジナルアンソロジー『恋だろ!?恋!』21（光彩書房・刊）読者コーナーにて編集部から読者への呼びかけとして「腐男子」も「腐女子」とともに用いられる。恐らく「腐男子」が活字になった嚆矢か。

2005年1月  
PCゲーム『好きなものは好きだからしょうがない!!』がアニメ化され地上波放映される。ボーイズラブ作品の初TVアニメ化。

2005年10月1日  
別冊ぱふ『BLM ビーエルマガジン』（雑草社・刊）創刊  
ボーイズラブ作品刊行専門情報誌の先駆では無いかと思われる。  
またこの本のタイトルは公的にBLをそのままビーエルと読み下した先駆であるかと思われる。惜しくも2号にて終了。

2005年12月1日  
『Newtype』（角川書店・刊）12月号掲載記事  
「2005年もの申す」掲載解説（106ページ）にて  
乙女ロードを「通称・腐女子ストリート」として紹介。

2006年3月16日  
『オタク女子研究 腐女子思想大系』（杉浦由美子・著/原書房・刊）刊行。  
腐女子を全面的にタイトルに掲げた書籍としては初めてのものかと思われる。

2006年4月  
ビブロス倒産。系列会社のハイランドも倒産する。

2006年5月  
リブレ出版発足。

2007年3月  
米・POP JAPAN TRAVEL 社“Yaoi Bishonen and Boys Love Tour”を企画し来日。  
このツアーは後年“FUJOSHI PARADISE TOUR”“FANGIRL PARADISE TOUR”と名を変え定着  
[http://web.archive.org/web/20070102205230/http://www.popjapantravel.com/tours/2007\\_yaoi.html](http://web.archive.org/web/20070102205230/http://www.popjapantravel.com/tours/2007_yaoi.html)  
ツアーの目玉として漫画家・立野真琴を交えての食事会が設定されていた。

2008年3月12日  
腐女子専用ポータルサイトと銘打った“腐女子.JP”開設。  
<http://fujyoshi.jp/>

2008年5月2日  
乙女用ポータルサイト“がる★ぱら”開設。  
<http://www.garupara.jp/>

2008年12月30日  
同人誌『腐男子にきく。』（吉本たいまつ・編著）刊行。  
学術的な面から腐男子の存在を考察した一冊。  
翌2009年3月8日には諸事情により同書の改訂版が刊行される。  
また続編『腐男子にきく。2』が2010年8月15日に刊行される。

2009年4月4日  
腐男子ポータルサイト“腐男子.net”、中国にて開設される。  
<http://www.fudanshi.net/>

2009年11月1日  
乙女のための図書館・cafe801（カフェハチマルイチ）、現在地にて開店する。  
<http://cafe801.org/>  
月に数日間、男子入店可能期間も設けられている。

2011年1月7日  
（株）ピクト・プレス営業停止。自己破産へ。編集プロダクションを経て出版社へ。  
二次創作アンソロジー及び個人選集で急成長するも…。  
なお、刊行物等の残務処理の一部は同じくアンソロジー刊行事業で頭角を現したCLAPが執行している。

2012 年 9 月 10 日

リブレ出版より咎井淳 (Jo Chen) 参加のユニット・ Guilt|Pleasure の著作  
『IN THESE WORDS』刊行。

訳出BLでは恐らく初めて品不足による入手困難な状態に陥る。

ちなみに Jo Chen は YAOI-CON に 2003 年以降ほぼ毎年ゲストとして招聘されている。